

第187回 上級 商業簿記

問題1は、仕訳および転記に関する問題でした。

問1はいわゆる資本連結、問2は電子記録債権・債務に関する問題です。どちらも基本的な内容ですが、問1では、子会社の取得が段階的に行われているため、「段階取得に係る差益」が生じる点に、問2では、保証記録の取扱いに注意が必要です。なお、債権と債務とを混同しているような解答（「電子記録債権」とすべきところを「電子記録債務」（又はその逆）とする例）も散見されました。問3は、繰越利益剰余金勘定とその他資本剰余金勘定への転記に関する問題ですが、転記の場合には、相手勘定（「繰越利益剰余金」や「損益」）を記入しなければならないのに、摘要の記述のような表現、例えば、「剰余金処分」や「当期純利益」という表現を使用している解答例（もちろん、誤答です。）がありました。これは簿記の初歩ですから、忘れないようにしてください。

問題2は、決算整理前残高試算表から決算整理を経て損益勘定を完成させる問題です。基本的な論点がほとんどでしたので、平均的に良くできていましたが、人により出来の差が大きいと感じました。なお、開発費は、原則として支出時費用処理で、例外として繰延が認められていますので、これを繰延資産として取扱い、償却する処理は誤りです。

また、問題文中で、計算の最終段階での四捨五入を指示していましたが、途中で四捨五入したとおもわれる答案がありました。これも、指示に従っていないということで、誤りとなりますので、注意してください。

最後に、問題1と問題2に共通している点として、これまで何度も注意しているところですが、数字が不明確で判別できない解答がまだありました。正答であるかもしれないのに誤答として扱うしかありませんので、残念でした。

第187回 上級 会計学

問題1は、いつもどおりの正誤問題でしたので、いつもどおりできる人はできていて、高得点を取っていますが、逆の人も相当数、見受けられました。特に、問題文の最後を否定形にして「……ではない。」という理由を書いている解答は、正答ではないので、注意してください。また、不正確な表現（「……以内の」が「……内の」や「期間」が「年数」など）や「説明しなさい」と指示しているのに、文章になっていないケースもあり、これらは減点の対象としています。また、「×」とした理由の正しい指摘をしているのに、誤った内容の記述がそれに付加されている場合、その誤りの程度によっては、誤答とせざるをえないものもありました。

問題2は、貸借対照表に関する「企業会計原則」の定めに関する問題ですが、誤字脱字が多いことに驚いています。例えば、「簿記」が「薄記」、「状態」が「状能」などです。また、「正規の簿記の原則」の原則となっていたり、「流動性配列法」が「流動性配列」や「流動配列法」、「繰延資産」が「繰越資産」となっていたりと、不完全な表現が用いられていました。なお、「財政状態が示せない」や「利害関係者にちゃんと伝わらない」などのぼやっとした表現は、理由の説明としては不十分です。

問題3は、比較的良くできていました。ただ、(ア) (イ) (ウ) の記号での解答を想定していたのですが、問題文中にその指示がなかったため、「増加する」・「減少する」・「変化しない」のみの解答も、OKとしています。

第187回 上級 工業簿記

今回の工業簿記は、二つの問題から構成されていました。問題1は、ロット別個別原価計算の一連のプロセスに焦点を当てた問題です。問題2は標準原価計算（直接材料費）の差異分析に焦点を当てた問題です。

まず、問題1は、材料費の計算にかかわる問1から問3、労務費の計算にかかわる問4から問6、製造間接費の差異分析にかかわる問7、個別原価計算にもとづいた完成品原価の計算にかかわる問8と問9から構成されていました。採点して気づいた点としては、次の三つです。第1に、さまざまな資料にもとづいて勘定を作成するという問題に不慣れな受験生が相当数存在するという点です。例えば、問3や問5では、材料費や労務費に関連する資料を事前に整理し、これをもとに材料勘定や賃金・給料勘定を作成する、というステップを経ることが必要です。しかし、事前の整理を経ずに、材料勘定や賃金・給料勘定の作成に取り組んでいる受験生が、かなりの数で見られました。第2に、一連の解答結果を前提とする問題に弱い受験生が多いという点です。問7では、それまでの解答結果を前提とした製造間接費の差異分析の結果をたずねていますが、問3や問5を理解していても、苦手意識を感じる受験生がある程度いたように感じました。最後に、工業簿記の基礎についての理解があいまいな点です。問1や問9では、工業簿記の基礎的な事項について質問していますが、期待したほど学習が進んでいない受験生が多かったように思いました。

次に、問題2は、直接材料費の差異分析にかかわる問1と、差異分析の理論問題である問2から構成されていました。問1は多くの受験生が理解していましたが、問2は十分ではなかったといえます。すなわち、解答そのものを放棄する、もしくは、あいまいな事項や関係のない事項を単に記述する受験生が、ある程度見られました。こうした傾向は、問題1の問6でも同様です。

この状況をふまえて、これから受験生にお願いしたい点としては、次の三つです。第1は、工業簿記のプロセスに注意を払うようにして欲しいという点です。多くの受験生は、材料費の計算、労務費の計算、製造間接費の計算、個別原価計算にもとづいた完成品原価の計算というように、それぞれのトピックについて学習していると思います。しかし、工業簿記は一連のプロセスですから、トピックごとの内容だけでなく、トピック間の関連性も意識して学習を進めて欲しいです。第2は、教科書を熟読するという点です。受験生の中には、教科書の説明を読み飛ばし、計算問題を中心に学習を進めている人もいます。しかし、単に計算問題を解答できるだけで、工業簿記を十分に学習したと言い切れないでしょう。理論問題などに強くなるためにも、これからは、教科書の説明を丁寧に読んでいただきたいと思えます。最後は、解答を丁寧に作成して欲しいという点です。誤字や判別しにくい文字・数字だけでなく、指示を無視した解答や解答箇所の誤りなどが見られました。これは、上の2点と異なり、当然のこととして気を付けるようにしましょう。

第187回 上級 原価計算

今回は問題1で設備投資の経済性計算、問題2で制約条件がある場合の製品組み合わせの問題を出題しました。

全般的に、問題文をよく読んでいない解答、解答用紙の指示に従わない解答が少なからずありました。

たとえば、問題1では、＜資料＞のところに、計算で端数が出た場合は万円未満をその都度四捨五入すること、という条件を付けましたが、これを無視して解答しているものが多数見られました。また、解答用紙には、マイナスの場合は△を付けること、と指示していましたが、－を使っている解答も少なからずありました。これらの指示を無視した解答はすべて不正解としています。

また、問題2では、問題文の指示をよく読まずに解答している答案が多数ありました。たとえば、問1では時間あたりの貢献利益を問うているのに、製品単位あたりの貢献利益を解答しているものが多数ありました。また、問2から問4では、それぞれの場合の貢献利益の総額を問うているのに、営業利益の総額を解答しているものも多数ありました。これらは当然不正解です。問題文をよく読んでいれば得られたはずの得点をみすみす逃している答案が多数ありました。

また、毎回採点講評で指摘するのですが、文字が小さい・薄い・汚い解答も少なからずありました。1と7、4と9など、判別しにくい数字を書いている解答が少なからずありました。数字くらい普通に読める字で書いてほしいものです。